

厳しさを耐えてこそその春



広島工業大学名誉教授 中山勝矢

暦をみると、今年の立春は2月4日。その前日が節分で1月の20日から続いた大寒も終わりです。厳しい寒さや雪の後に巡ってくる春ですから、明るい気持ちになります。

真冬でも咲いていた山茶花の傍らで春を待ちわびた椿が花をつけ、桜並木もほのかに色づいてきます。葉を落とした梅や欒の枝に新芽を見つけると嬉しくなります。(写真1)

この世にある限り、人も動植物も厳しい環境との戦いが続きます。やっと春が来て新しい命を見つけたときは、よく生き残れたねと声をかけたくなるほどです。

●冷害に強いジャガイモ

現在われわれは、ジャガイモの食品に囲まれています。ポテサラ、コロケ、ジャーマンポテト、マッシュポテト、肉じゃが、ポテトフライ、ポテトチップスなどなど。

ジャガイモは、昔から旧大陸にあったものではありません。いわゆる四大文明の基盤となったエネルギー源は小麦などの穀類や豆で、この余剰が人々の活動を支えたのでした。

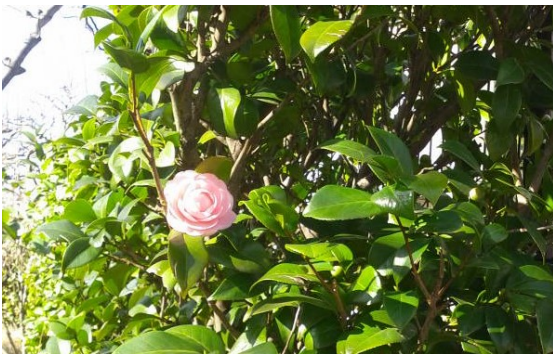
ジャガイモの単位面積当たりのエネルギー生産量は、小麦の3~4倍にも達するという説があります。つまりその分だけ人口を維持でき、文明の向上に使えたのです。

ジャガイモの原産地は、南米のペルーとボリビアの境界辺りに広がる標高4,000m級のアルティプラノ高原で、スペイン人たちが大規模に栽培されているのを見つけたのです。

日中の気温が20℃位あっても夜は氷点下に冷え込むような厳しい環境の土地で、紀元前3000年頃すでにジャガイモは多くの収穫をもたらしてくれていたようです。

穀類に比べジャガイモは、水分が多くて保管と輸送が大変です。薄く切って乾燥させ、粉碎することで、この問題が克服され、多くの人の定住が可能になったと考えられます。

それが高度なティワナク文明を生み、インカ帝国が築かれました。後にインカ帝国を滅ぼしたピサロ軍の一員により、ジャガイモは欧州にもたらされます。



(写真1)葉の落ちた庭木の間で、春の訪れを待ちわびて咲いた椿の花

それから約100年の間は、主にスペインで栽培され、少しずつ食品として商取引がなされるまでになりましたが、見た目が悪く、食品としての評価は低かったのです。(写真2)

なかにはその形から、「ジャガイモを食べるとハンセン病(ライ病)になる」といった噂まで流布され、恐怖心を抱いた人も少なからずいたというのですから驚きます。

● 災いを福に転じる

欧州で早くに庶民の食事にジャガイモが供されるようになったのはプロイセンです。そのためにはフリードリヒ大王自らが大衆の前で食べるなど、啓発に努めたとあります。

18世紀半ば、プロイセンは冷害に襲われ、麦類の凶作が続いたことがありました。幸いに、寒さに強いジャガイモは被害が少なく、人々は飢え死にを免れたのです。

この施策で人口が増えて国力は充実し、強大なドイツの基礎が固まりました。13年の間に、プロイセン軍の兵力は実に8万人から13.5万人、つまり70%も増えたといえます。

同じ頃、欧州各地で植物病が発生していました。アイルランドの場合も、人のエネルギー源として頼っていたジャガイモが植物病で全滅。米国への多量移民が発生しました。

だが何と、このアイルランドからの移民の子孫から、35代ケネディ、40代レーガン、さらに42代クリントンの3人の大統領が誕生しています。まさに春が来ているといえます。

人に限らず生物は、生存に必要なエネルギー源が厳しくなれば消滅の危機に直面します。その際に新しい食用植物の出現は、生態系や文明を大きく揺さぶるのは当然です。

かつては野生のジャガイモには毒性があり、イノシシも口にしませんでした。技術と品種改良で無毒になった現在、ブタの餌にも使われて新鮮な肉の供給に役立っているのです。

現在ジャガイモ生産量の第1位は中国で、インド、ロシア、ウクライナ、アメリカ、ドイツと続きます。この裏には厳しい環境と食肉に関係がありそうに思え、興味を引きます。

参考資料: 酒井伸雄「文明を変えた植物たち」

(NHKブックス2011)

山本紀夫「ジャガイモとインカ帝国 文明を生んだ植物」(東京大学出版会2004)



(写真2) 春になって芽の出たジャガイモ(アンデス地方では、野生種は1000種類以上あり、食用としては約100種類の品種が栽培されているという)